

卒業生からのメッセージ



吉田 蘭 さん

【プロフィール】
2006年度プロジェクト科目「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」受講生。2009年3月に同志社大学政策学部政策学科を卒業し、現在株式会社りそな銀行東京営業部に勤務している。

大学2回生の時に、「小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究」を受講した。幼い頃に観た薪能が素敵だったことを思い出し、何となく参加したのが始まりだった。当時の私は、授業に身が入らず、サークル活動も行わず、人付き合いが苦手な事も相まって、単調な生活を送っていた。

プロジェクトの目的は、子供たちに向けて、能楽とはどういうものかを伝える汎用性のあるプログラムを作ること。メンバーは、学部も年次も異なる8人。目的を達成する方法は誰も教えてはくれない。会議を重ね、能楽師さんへの取材、能楽鑑賞等様々なプロセスを経て、最終的に同志社小学校でのワークショップを成功させる事ができた。



プロジェクト科目を受講している間は、学びの連続だった。チームで物事を進める時には、役割分担を明確にしなければいけないこと。曖昧なテーマは、議論を重ねることで具体的な行動へと落としこ

まれること。ステークホルダーが多岐に渡る場合は、情報共有が大切であること。そして何よりも、他者と本音でぶつかることで、気持ちの良い関係が生まれること。当たり前なことなのかもしれないが、狭い世界でモラトリアムを満喫(?)していた私にとっては、全てが新鮮な体験だったのだ。

今、私は、銀行で法人渉外を担当している。どうすればお客様の役に立ち、会社の収益に貢献出来るか、毎日四苦八苦している。社会に出て働くことは、プロジェクトを進めることととてもよく似ている。以前の私のように、大学で何をしたら良いか分からない人にこそ、飛び込んで欲しいと思う。



2013年度プロジェクト科目秋学期成果報告会の様子

同志社大学PBL推進支援センターでは、プロジェクトを推進するために不可欠な知識や技能を総合的・創造的に運用するために必要な能力をプロジェクト・リテラシーと設定し、その学びを最大限に引き出すために様々な場面に応じた学習支援を行っています。PBLを基本とする授業科目「プロジェクト科目」では、春学期末・秋学期末に各1回開催するプロジェクト科目成果報告会の準備時期に合わせて、プロジェクト・リテラシー講習会を実施しています。今年度は春学期、秋学期とも、授業活動のアウトプットである成果報告会の形式（ポスターセッション）にそった内容で開催しました。授業活動において行われるインプット、アウトプットとともに、学習支援プログラムを設定する視点から、PBLにおけるインプットとアウトプットの往還学習の効果について検証します。

PBL

Project-Based Learning

推進支援センター通信

VOL. 9

PBLと学習支援 —インプット・アウトプット往還学習—

プロジェクト科目検討部会長 PBL推進支援センター長
文学部教授 山田和人

PBLは、インプット型の学習スタイルではなく、それぞれのプロジェクトの活動成果をアウトプットすることで、その成果を客観的に学習者自身が把握し、自己評価できるようになることが重要である。PBLで実施される成果報告会もそうしたアウトプットのひとつであり、自己評価の現場と言える。

ただし、アウトプットは最終成果発表だけを意味するものではない。むしろ、プロジェクト活動で習得した知識や技能を実践的に活用していくプロセスで、学習者はインプットとアウトプットを繰り返しており、その往還を通して、自らの学びを深めていくことができるようになっていく。指導者は適切な段階でアウトプットの機会をきめ細かく設定することで、プロジェクトが迷走することを防ぐとともに、学習者のための自己評価の場を創出していくことができる。というのも、アウトプットを通して修正点が明確になり、その対応を考えることによって解決すべき課題が明確になり、いま必要なもの、いまインプットすべきものが何なのかを的確に理解、認識できるようになっていくからである。

ここで、重要なのは、習得した知識や技能を自分一人のものに留めるのではなく、チームのメンバーと共有して、チームの目標を達成するために活用していくところにある。チームの学びを通して多様な価値観と出会い、相互に刺激し合う学習環境を学習者自身が作り出していく。その環境がチームにとって最適なものとなっていく

時、プロジェクト学習のアウトプットの質は飛躍的に向上していく。実は、そこで得た知見をもとに、他のプロジェクトに対する評価の精度を上げていくことも同時にできるようになる。まさに学習者同士の相互評価によって、自分自身の取り組みを相対的に評価する視座を獲得することができるようになるのである。

そのために、プロジェクトの初動段階から最終段階に至るまで、指導者は効果的なアウトプットの機会をさまざまなかたちで提供するように心がけるべきであろう。

また、組織的にPBLを運営していく場合には、インプットにも工夫が必要である。初動段階では、PBLに関する基礎知識の講習・説明会、チーム作りのワークショップ、リーダーシップ・フォロワーシップのワークショップ等を適宜開催し、中間段階では、企画書作成のワークショップ、冊子編集やイベント企画・撮影技術のワークショップ等を通してスキルアップを図る。最終成果報告では、プレゼンテーションの技術についてのワークショップを開催する。全段階を通して、ワークショップ型の動的なインプットが効果的である。こうした段階に応じた学習支援がPBLの運営にとっては重要である。

PBLはインプットとアウトプットの往還を通して、学習者自らが学びのサイクルをまわし、チームとともに相互批判できる主体を確立していく。そこにこそPBLの学びの醍醐味がある。

山田センター長のつぶやき



同志社大学PBL推進支援センターの
山田和人センター長によるコーナーです。

PBLは、学生に悩む力を付けさせる学習かもしれない。あらかじめ解を与えなければ課題に取り組めないと考えるのは、教師の思い込みだろう。学生は自ら解を求めて世界をさまよう。それが知的探求心であり、それが学ぶという行為だろう。ほくはさまよい悩める学生の真摯さに胸を打たれる。

～山田和人センター長 Twitterより抜粋～
<https://twitter.com/kazuhityamada>

2014年度プロジェクト科目始動!!

2014年度プロジェクト科目については、2013年8月下旬より公募を開始し、厳正なる審査を経て、20件を開講することを決定しました。内訳として、京田辺校地5件、今出川校地15件、講期間別では、春学期開講科目3件、秋学期開講科目1件、春学期・秋学期連結科目が16件です。2014年3月29日(土)に先行登録会を行い、正式開講となります。地域活性化、伝統文化・工芸の振興、芸術・スポーツを通じた社会貢献、商品開発や、生活環境・社会的課題に取り組むものなど、2014年度も多彩なテーマが展開します。

詳細はプロジェクト科目のホームページをご覧ください。

プロジェクト科目

プロジェクト科目とは?

2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、受講生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。



【問合せ先】
同志社大学PBL推進支援センター
〒602-8580
京都市上京区今出川通烏丸東入 今出川校地教務課内
Tel: 075-251-4630 Fax: 075-251-3064
E-mail: ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp
【ホームページ】
PBL推進支援センター <http://ppsc.doshisha.ac.jp/>
プロジェクト科目 <http://pbs.doshisha.ac.jp/>

PBL推進支援センター2014年度事業予定

2014年度、PBL推進支援センターでは、教育方法としての質的な向上を目指して、以下の事業の開催を予定しています。

- 2014年5月 2014年度シンポジウム
- 2014年8月 第1回PBL推進協議会
- 2014年11月 PBL教育フォーラム2014
- 2015年2月 第2回PBL推進協議会

日程等に変更が生じることがあります。詳細につきましては、PBL推進支援センター ホームページにて、順次ご案内いたします。

2013年度プロジェクト・リテラシー講習会は、春学期に「伝える技術」、秋学期に「表現する技術」として成果報告会本番を想定した実践的なワークショップを行いました。これらの内容は、アウトプットの場に活かされたのでしょうか？ プロジェクト・リテラシー講習会講師および講習会参加者からのメッセージを紹介します。

伝える技術について・表現する技術について～ポスターセッション



2013年度
プロジェクト・リテラシー講習会
講師

パワープレイス株式会社
常務取締役
濱村 道治 氏
<http://www.powerplace.co.jp/>

ポスターセッションの醍醐味は、何と言っても聴衆者との距離感と双方向性です。一方通行型の発表会スタイルと異なり、聴衆者のダイレクトな反応によりライブな達成感を得ることが出来ます。ただし、ポスターセッションでは、ポスターに聴衆者が立ち寄り頂けなければプレゼンテーションが成立いたしません。人目に止まるキャッチなポスター、プレゼンターファーストインプレッション、この2点がカギとなります。心理学的研究によりますと、非言語的表現(ノン・バーバル・コミュニケーション)が第三者への伝達において大きく作用すると言われております。つまり表情や身振り、しゃべり方などをさします。セッションでのプレゼンターにはこれらのスタイルが要求されます。実社会ビジネスシーンでは、双方向型のプレゼンテーションが圧倒的に多く、ポスターセッションに近い状況だと言えます。

同志社大学プロジェクト科目成果報告会は、ポスターセッション形式を取り入れており、社会人の基礎的な能力を形成することに繋がると考えます。



(プロジェクト・リテラシー講習会の様子)

プロジェクト・リテラシー講習会に参加してみた



2013年度プロジェクト科目
「音楽は心の薬-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して」
受講生

経済学部
経済学科 2年次生
熊谷 成美 さん

プロジェクト科目の成果報告会はポスターセッションで行いました。ポスターセッションはプレゼンテーションと異なり、ポスターを上手く使用しながら説明し、「話し手と聞き手とのコミュニケーション」を行いながら活動内容や一年間の成果を発表しなければならないということを講習会で学びました。この学びを糧とし、幾度も練習を重ねたり、メンバー間で活動内容や想定される質問に対する答えを共有したり、授業の始めに必ず発声練習を行ったり、本番の成功に向けて完成度を高めていきました。

本番の成果報告会では、聞き手に対する質問に対応しながら、一年間の活動報告とプロジェクトを通して学んだことなどを相手に簡潔に分かりやすく伝えることができたと思います。この結果、見事、最優秀賞という素晴らしい功績を残すことができました。最初は人前で話すことが苦手だった私ですが、ここまで出来るようになり信じられません。ポスターセッションで学んだことを自分の財産とし、今後の将来に活かしていきたいです。



(2013年度秋学期成果報告会ポスター)

◆2013年10月26日(土) PBL教育フォーラム2013

今出川キャンパス良心館において、PBL教育フォーラム2013「PBLにおける学習効果の検証-卒業後の現場から-」を開催しました。本事業は、株式会社SIGELの共催を得て、毎年秋学期に実施しています。3回目となる今回は、長年にわたりPBLに取り組む武蔵大学、東海大学、広島経済大学、同志社大学から、PBLを経験した卒業生が登壇し、社会人の立場でPBLの学習効果を検証しました。当日は、全国より約130人の参加がありました。

第1部は、各大学教職員より取組内容と特色が紹介された後、PBLを修めた各卒業生から、そこで得た学びが、現在の職場でどう活かされているかという共通の問いに対しての発表がなされました。第2部は、「社会が求める人間力と大学が育てる人間力」をテーマに、パネルディスカッションを行いました。会議や取引先との交渉などで課題に直面した時、PBLでの経験がどう活かされ、何が足りなかったのか、山田和人センター長のコーディネートのもと、登壇した各大学卒業生4名による議論が展開されました。会場の本学プロジェクト科目受講生や他大学在学学生からも、活発に質問が上がり、在学生にとっても身近な興味と話題であることがうかがわれました。



◆2014年1月15日(水) 2013年度プロジェクト科目秋学期学生懇談会

◆2014年3月1日(土) 2013年度プロジェクト科目秋学期科目担当者・代表者懇談会

プロジェクト科目の受講生代表による、秋学期の学生懇談会を開催しました。これまでは、今出川校地に全科目の代表が集まっての開催でしたが、京田辺校地で授業のある学生も負担なく出席できるよう、テレビ会議で両校地を結び形で行われました。懇談会では、活動内容の報告に続いて、プロジェクトを推進していくうえで困難だと思われた事例を挙げ、どう対応して課題を解決したか、または、克服できずどんな問題点を残したかについて、意見交換がなされました。学年や学部を超えて集まった受講生、地域社会、企業、ユーザーなど、各々の思いが違うものをどうまとめていくのか、全体的に物事をみることが出来るリーダーの役割の大切さについて議論は尽きませんでした。3月上旬には、科目担当者・代表者懇談会を開催し、一年間の振り返りを行います。



◆2014年1月17日(金) 2013年度プロジェクト科目秋学期SA・TA協議会

学生懇談会の2日後に、SA(スチューデント・アシスタント)・TA(ティーチング・アシスタント)協議会を開催しました。教員を含むメンバー間に意識のずれが生じたときSA・TAがどう関わるのか、受講生のモチベーションが低下した際のSA・TAの役割についてなど、様々な角度から問題を抽出し、さらに分析するところまで議論がおよびました。大きな論点は、活動の初段階において企画や方針を決定する際の基準についてでした。意見の寄せ集めではなく、企画提案者は企画への責任感を持ち、他の受講生は企画が実現可能であるのかを冷静に判断し納得できているのか、今後の運営に向けて多に活かすことのできる内容の協議会となりました。



◆2014年1月19日(日) 2013年度プロジェクト科目秋学期成果報告会

今出川校地・京田辺校地にて開講している全14科目(春・秋連結科目)の受講生が一堂に会し、秋学期成果報告会を開催しました。今出川キャンパス良心館ラーニング・commonsで行われた今回の報告会では、科目ごとに、1年間の活動内容をまとめたポスターをもとにして、受講生全員が聴衆とのセッションを繰り広げました。当日は、本学学生、各学部教務主任の先生方などによる審査員はもとより、広く他大学や教育機関関係者、学生、一般の方などを含めた200名近い参加者があり、会場は熱気に包まれました。本年度は、春学期、秋学期ともに同様の発表形式にしたことで、春学期の成果報告会から得た学びが活かされた発表がなされました。どの科目もポスターから聴衆の興味を引き出しつつ、質問の意図を汲み取って明確に答えるといった、対話することが意識的に行われていました。受講生は、聴衆との対話を通して得る、さらなる学びを報告会の場で実感したようです。ポスターセッション終了後、審査員および受講生の相互評価による投票が行われ、最優秀賞、優秀賞が決定しました。また、問題提起や、情報共有、プロジェクト活動の軌道修正などの場面で、いかに活動を文字化し、CNS(※)を活用したかについて、一番評価が高かった科目を特別賞として表彰しました。

●最優秀賞:音楽は心の薬-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して
<今出川校地開講、春・秋連結科目、最終報告>

●優秀賞:世界遺産をデザイン!~花「桜」と共に生きる吉野山プロジェクト
<今出川校地開講、春・秋連結科目、最終報告>

●特別賞:音楽は心の薬-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して
<今出川校地開講、春・秋連結科目、最終報告>



※CNS(Community Networking Service)=SNSをベースに開発された、プロジェクト科目の活動を円滑に支援するための学修支援システム。

2013年度秋学期プロジェクト・リテラシー講習会 2013年12月16日(月)

今年度第2回目のプロジェクト・リテラシー講習会を両校地で開催しました。今回は「表現する技術」として、内容を一方的に伝えるだけでなく、複数の聴衆を相手に、対話が活発に行えることを目指した内容が進められました。さらに、プロジェクト科目を受講している参加者は、科目ごとに、成果報告会で発表する内容のポスターを事前に作成。対話だけでなく、ポスターの記載内容についても質的向上を目指した講義がなされました。前半のワークショップでは、講師陣によるポスターセッションを参考に、5~6名のグループに分かれ、全員が2名の聴衆を相手にロールプレイング演習を行いました。さらに各グループから選出された代表の発表者に対して残りの参加者が聴衆となり、制限時間内に自由な形で参加する模擬成果報告会が行われ、最終的に全体での最優秀者を決定しました。後半では、春学期の成果報告会のポスターを例に、①5~10分で収まる内容か②余分な記述はないか③メンバーで共有している内容か④セッションの内容と同期しているかなど、講師陣からのアドバイスに、参加者は真剣に耳を傾けていました。

